

ウォルター・ウエストンの軌跡を辿る

2014/11/14 妙義 金鷄山・筆頭岩

メンバー：齋藤(CL) 落合(SL)

行動時間：見晴らし台駐車場 8:10→金鷄山ピーク 9:00→筆頭岩取付 11:10

→P3 大テラス(登攀開始) 11:30→筆頭岩ピーク 13:10

→懸垂下降(2回)・南壁基部 14:00→下山(県道) 14:20



中ノ岳神社から望む筆頭岩(左)と金鷄山(右)

ウォルター・ウエストンが根本清蔵を案内人とし、日本で初めてザイルを使った近代登山法で登ったと言われる妙義の筆頭岩。

今回は金鷄山から縦走し、100年程前の先人の挑戦に思いを馳せながら筆頭岩を登ってみることにした。

平日の妙義のバリエーションなんて絶対貸切りと思いきや、世の中には物好きがいて金鷄山には先行の2人組の方が登っている。そんなことを言っても私と落合さんも人のことは言えないのだが。

金鷄山は表妙義の稜線からは離れており、そこだけが独立しているような山並みとなっている。そのため表妙義の金洞山や白雲山の展望がとても素晴らしい。



白雲山の稜線（金鷄山ピークより）

金鷄山のバリエーションをやるなら絶対金鷄山から筆頭岩を目指すのがお勧めだ。この大パノラマを望みながら最後にウエストンの登頂した筆頭岩に登攀できるからである。

金鷄山へは県道から南稜の尾根に取り付く。しばらく行くと妙義特有のたどん状の岩稜になる。上に行くと傾斜の強い樋状とリッジ状になるので適当に登る。私も落合さんも前回の木戸壁でたどん岩への不信感がありどうしてもホールド・スタンスが信用できない。ここは傾斜も高度もあるので初心者がいれば迷わずロープを出した方がよい。



金鷄山直下のたどん岩の樋状&リッジ

金鷄山から筆頭岩まで地形図上では稜線通したが、実際には地図では読めない細かなアップダウン、岩稜・岩峰のトラバースなどが結構あり、ルートファインディングが試される。そこがバリエーションの面白さでもある。

実際、私も2回ほどロストして少し戻ってルートに復帰することがあった。

しかし、そこは妙義特有の地形とクセを熟知し西上州をこよなく愛する落合さんの抜群のカンと読みに救われ、まさにそれはウエストンが根本清蔵を頼りにして登ったのと同じ安心感であるのと違いない。

ルートの詳細についてはこれから入る方のためにもあえて記述はしない。(溪嶺で入る人はもういないかもしれないけど…) せっかくのバリエーションの面白味が無くなってしまいうからである。現地でのルートファインディングはそこに足を踏み入れた人の楽しみでもあると思う。



筆頭岩の「ハチの渡し」

根本清蔵がスズメバチに頭を刺され、瞼が腫れあがった片眼だけで登ったことからそう呼ばれているようである。ちなみに根本清蔵は自分が万一落ちるとウエストンが巻き添えになるので自分はノーザイルで登り後のウエストンを確保したらしい。(フリーソロ?!)

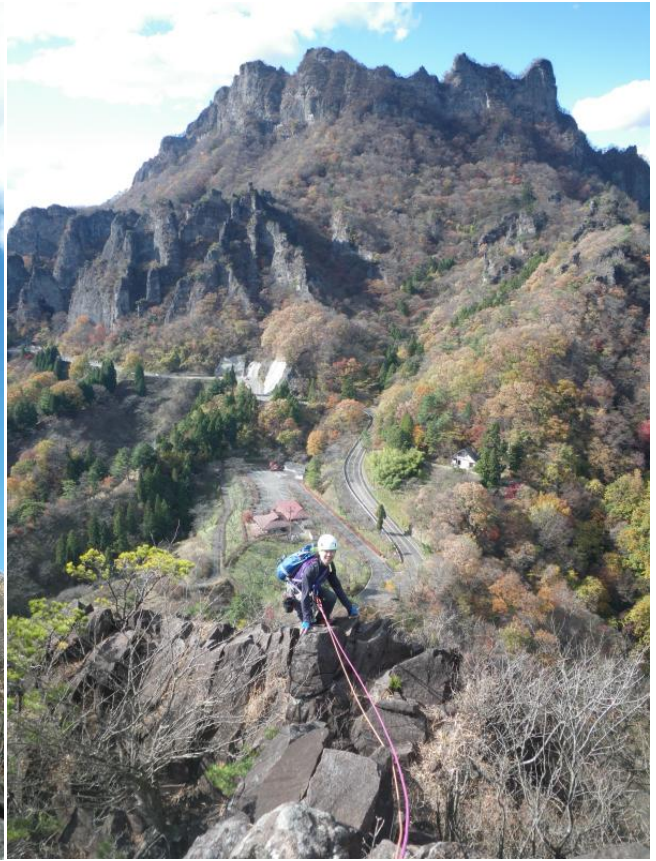
筆頭岩はP3の大テラスからP1のピークまで3ピッチで登れる。この岩質はたどん岩とは異なりクラックやリスがあるためナチプロで登った方が面白い。残置ハーケンはほとんどない。鎖はかなり古いらしく使わない方が賢明だし、フリーで登った方が楽しい。

ここまでの行動は11月にしては暖かい位であったが、筆頭岩の岩稜に出たところで寒風吹き抜ける登攀となった。ロケーションは最高なのだが二人ともシェルを着ないで登りだしてしまったので寒さと鼻水に耐えることとなり、ウエストンに思いを馳せるどころではなくなってしまった。

(ハチの渡しではいつからのものか分からないが、ホームセンターで売っているようなロープがフィックスしてありいささか興ざめである。)



P 2 への登り

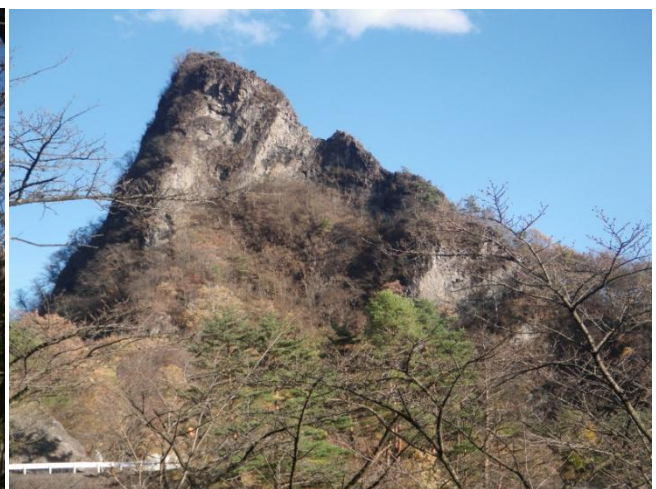


直下のリッジと妙義山

筆頭岩からは南壁基部への懸垂下降となる。最初はシングルで10m程テラスへ下り、2ピッチ目はダブルで30m程下る。最後は下降の方向にもよるが空中懸垂となるので面白い。あとは適当な所から下れば県道に出て終了となる。(県道が近いので絶対落石を落とさないよう注意が必要。)



南壁基部への懸垂下降



さくらの里からの筆頭岩
(ギャップが「ハチの渡し」)



金鶏山ピークにて

今まで西上州エリアは裏妙義の沢登りと木戸壁右カンテでしか行ったことがなかったが、表妙義は今回初めてであった。岩峰・岩稜の交錯する妙義の山容と地形は独特で、足を踏み入れれば踏み入るほどその魅力に惹き付けられてしまう気がする。

1000mそこそこの山でありながら、岩も脆く、崩落や不明瞭さ等の不確定要素が多分にあり、かつルートファインディングの難しさと安全に踏破する技術を要する西上州の山々に大きな魅力と可能性を感じてしまう。

そんな西上州の山々にハマリそうである。たどん岩が好きになれるかもしれない。

ちなみに落合さんが相馬岳や金洞山を嬉しそうに眺めていたのは言うまでもない。

(記録：齋藤)